矢野の歴史講座～文化編～

平成２５年１０月５日

矢野の秋祭りの名物　頂戴（ちょうさい）

矢野の祭りをにぎわす山車（だし）に「頂戴（ちょうさい）」がある尾崎神社の神輿渡御の案内・先祓いを争うて、たがいに揉みあった。これを、ちょうさい喧嘩といって、面白く見物した。御旅所は姫宮神社である。頂戴は神輿の御通りを早めまいとしてなかなか動かないので、その中を赤鬼や青鬼が出てきて御渡の進行を取り計らう・・・

○尾崎八幡宮（尾崎神社）　野間氏の矢野に入ってからはじまる。文明２年（１４７０年）「宮のうね（現：矢野西小学校）」につくられた。慶長１９年（１６１４）現在のところ（尾崎山）に移った。明治１３年（１８８０）郷社となり、　昭和８年（１９３３）社格は県社となった。１０月に行われる祭りは、秋祭りといわれるが子どもたちは”おにまつり”とも呼ぶ。
○姫宮神社　姫神を祭る姫宮社は、鎮座不詳(ちんざふしょう)の古い社(やしろ)。
元禄４年(1691 年)、尾崎神社の御旅所(祭礼の御輿が渡御して仮にとどまる所)は、荒神社から姫宮社に変わって現在に及ぶ。川向うに姫宮神田(しんでん)があり、姫宮早稲(わせ)を作り、領主に奉納していた。

１．いつからはじまったのか？

頂戴は上方から移入された。頂戴の型は、京都祇園の鉾台とも大阪の団尻型とも伝えられる。最初にもたらしたのは町若連中で、江戸中期の文化年間（一八〇四～）、すなわち十九世紀初めと察せられる

→ちょうさいの若組連中のうち、町若連中は文政三年寅辰（一八二〇）八月、ちょうさいを売却して、尾崎八幡宮に唐獅子を寄進している。(現存。石造二基。「野間氏　町若連中、世話人　網屋幸右衛門・湯木忠兵衛」)

→「天保十二年丑年（一八四一）旧八月十五日　どさぶり雨（ママ）ふり申候処　御祭礼八月十六日二成（なり）　長さい（ちょうさい）出で申さず」と友未家文書にある。

２．はじまった頃の矢野の時代背景

ちょうさい上方から移入されたのは、かき・かもじに特徴づけられる江戸期の矢野の商工業の発展をかえりみれば肯けられるであろう。(当村から蛎業者で堺や大坂・兵庫へ向かっているところから、山車の購入が容易に行なわれたものと思う。矢野の蛎業者が大坂に進出したのは１７６７頃から)。

一方、尾崎神社は広島藩の社倉総鎮守、薄費で社倉祭（※）が執行されていた。薄の重役連の八幡宮への代参、盛大な祭礼の執行、藩費による社殿の造立・修理など、矢野村は文化的華やぎに満ち、こうしたなかに御輿の渡御、ちょうさいや獅子舞の奉納が盛んに行なわれるようになったものであろう。

社倉(しゃそう)とは？

飢饉に備えて穀物を特別に貯えておくこと。貢租，課役の負担の過重な江戸時代には凶作のたびごとに飢饉が起っていた。18 世紀頃から全国諸藩の中ではこの制度をはじめる例が見られた。矢野村では、尾崎八幡神官の香川正直(かがわまさなお)の指導によって寛延 2 年(1749)社倉法による備荒貯麦を周囲に先駆けてはじめていた。そして、宝暦6年(1756)の飢饉の際には藩の救済を受けずに1人の飢餓(きが)人もださなかった。その効果の大きいことを認めた広島藩では，安永 8 年(1779)藩内全部の村々に社倉法の実施を命じ，以後，明治初年まで存続した。

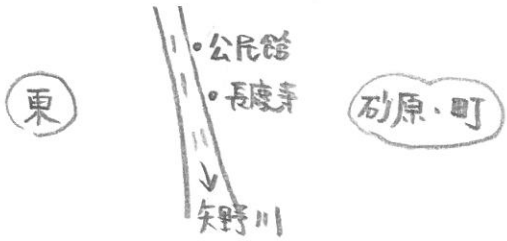
3、呼称のゆらい

ちょうさいは、頂戴（矢野町史）と書く。（一般には兆代と書いているようである）。頂戴はチョウダイ、チョウサイとは読めない。「（目上の）人からもらった物を目の上まで差し上げ、頭を低く下げて、敬意（感謝の気持ち）を表すことが頂戴すること（新明解国詩辞典）。例の「太平記」二四には「七社の神典を頂戴」とある。

山車は、各戸で花（祝儀）を頂戴すると、山車を、高く差し上げて、「頂戴々々」といって喜んだ。「ちょうだい」が「ちょうさい」と変り、やがて矢野の「ちょうさい」の呼称となったようである。「広島県大百科事典」（中国新聞社刊）は、山車を担ぎ上げるときの掛け声「ちょうさい」を起源としている（いずれにせよ、頂戴は「ちょうさい」とルビを打たねばならない）。

4．６つの連中、喧嘩頂戴の様子、水の分配をめぐった時代背景

頂戴担ぎの若者は、各組毎に色分けした華やかな衣装（法被）をまとっていた。昔、頂戴を持っていた若者組は次の６組であった。



町若連中「轡（くつわ）」紋
花上若連中「軍配」紋
東若連中「日の丸扇」
浜若連中「錨」または「轡」紋
中若連中「升」紋　（御輿渡御・御輿付きとして、先き祓（はらい）の慣行があった）
上（あげ）若連中「蛇の目」紋

ちょうさいの喧嘩相手にふれる。矢野村の水田耕作に必要な水の分配にかかわる反目　――同じ矢野川から取水する東と上のけんか。また町と東のけんかは、矢野川が出水時に堤防を切る、切らぬの論争がもとであった。切れば低地の本町は冠水し、切らねば川筋の砂原が被害を受ける。水の分配は農村時代の社会問題であった。（喧嘩の流れもそこからきているのではなかろうかと推測する）

５．祭りの様子、囃唄など

「矢野頂戴沿革誌」にまとめられている｛上連中台帖　明治四十三年｝より

・「規則　第壱条　上連中ハ連中一統ニテ成立スル」・・規則があった

・役位　　上若連中中老頭取締（１名）、中老頭（１０名）、小頭取締（１名）、小頭及び相談役（２名）、小頭（１１名）、この下に「連中若イ者」多数が加わる組織になっている。

・太鼓叩き・・若衆の士気を鼓舞し全体の統制の重責を担うものである。四人いる。「関係地域町内の子供に限り」と決められた。毎年泥落し時の役員会で選出され、打ち方の訓練を受けた。1・担揉時（かつぐとき）2・急揉時（いそぐとき）3・落時（おとしどき＝休む時）の三様があった。それに早太鼓というちょうさい喧嘩の時の叩き方があった。

ちょうさいの囃唄（はやしうた）

頂戴では、さまざまな場面での囃唄があった。その一部を紹介する。

「かき舟歌」

・鴨(かも)よ(娘のこと)泣く泣く　三月にや帰るおそうて四月の中頃に(囃)ソレソレ　エジャナイカ

・蛎屋仕舞うたらよ　早う出航(で)て帰れ　冬の寒さを寝て忘れよう　大井細越は涙で出航(で)たがよ　横(坂村横浜のこと)の森山は　唄で越すよ

「若連中」（上連中の例）

蛇の目ハッピのォ　若い衆を見ればよォ　乙女心(おとめごころ)に花が咲くよォ　(囃)ソレ　ソレ　エエジャナイカ

粋(いき)な蛇の目でよォ　拍子木かざせばよォ　うちのかあちやんが二目惚(ふためぼ)れよォ／(囃)ソレ　ソレ(略)

御輿送ろかよォ　上(あげ)若連中がよォ　女神(めがみ)ます社(やしろ＝姫宮社)までよォ

「恋情」

・送りましょうか　送られましようか　せめて出合の橋までよォ　人が見たらよォ　横丁によけてよォ　恋の抜け道廻り道よォ

・抱いて寝てくれよォ　抱かれて寝ます　間(あい)に集る子が無いうちに

「人物」

・それ武蔵の弁慶は　播磨のお国で育てられ　三つの上は四つ五つ六(む)つ　七つ道具を背(せな)に負い　五条の橋に急がれた　(囃)イソゲヤイソゲ　わしの好きなよォ

・学校の先生は　いつも袴(はかま)はいてこうもり傘よ

・寺の坊主はよォ　煮た餅が嫌いで　焼いて焦(こが)して砂糖つけてよォ

「ちょうさいを　かつぐとき」

・わしが思うてもよォ　お前さんがならにやよォ　磯のあわびで片思い

・お前さん待ち〃蚊帳(かや)の外　蚊にくわれ　七つ(朝の七時か)の鐘が鳴るまで

・お前三十六　わしゃまだ十六　えっと違わぬ　二十違うよォ

※ついでながら、ちょうさいの囃（はやし）にふれておく。

「エージヤナイカ」

慶応三年（一八六七）名古屋に起こり、各地に波及した群衆の狂乱的な歌舞。伊勢神官

の信仰と結びつき、維新になれば世の中が改まるといって踊り狂った「ええじゃないか運動」から採り入れられた（矢野町史）

6．時代の移り変わりと頂戴

ちょうさいは、昭和初年、東・中・上組の三基が残っていた。第二次世界大戦中は時節柄、祭りも質素になり、心ばかりのことを形式的に行っていた。（出店が少しでるくらい）ちょうさいは戦後はいったん復活したが、資金難や担ぎ手不足等で、現存するのは上組一基のみとなった。

下記の「　」内は記録からの引用。

町若連中「轡（くつわ）」紋
　○文政三年（一八二〇）頂戴を売却し唐獅子を奉納
　○明治三年（一八七一）兵庫から頂戴を買う。「大浜湯木息兵衛氏が栃船営業の帰りに兵庫から買い求めたが、その時には町の若者十六人が兵庫に出張し、蛎船までかつぎ出し、船に積込み持ち帰った」
　○「昭和三、四年ころ破壊、その後再調せず」
花上若連中「軍配」紋
　○「明治二十三年（一八五〇）頃、浜組と共に船越や其他へ売却」
東若連中「日の丸扇」　戦後に売却。
浜若連中「錨」または「轡」紋
　○「安政四巳（一八五七）八月大浜二町載（ママ）買侯、船越にてあり、代銀九拾目也」
　○「明治二十三年（一八五〇）頃、花上若連中と共に船越や其他へ売却」
中若連中「升」紋（御輿渡御・御輿付きとして、先き祓（はらい）の慣行があった）戦後に売却。
上若連中「蛇の目」紋
　○大正初年（一九一二）破損して新調。

※矢野の町内のほとんどは、子供神輿を持っている。町内会や育成会がその世話をしている。大井のは、ちょうさいの小型のものでよくできている。三つの俵を積んだのもあるが、ほとんどは、いわゆる神輿さん式である。ビューシティなどの高層マンションなども、街をにぎわしている。
上（あげ）の子供連（中）はマル印（蛇目紋印）のハッピを、花上は軍配をアレンジしたのを羽織っている。ちょうさいが数を減らしたあとだけに、伝統が一部なりと残っているのを嬉しく思う、そんな矢野人もいるだろう。

7．頂戴～伝統・文化を伝えていく

上組頂戴保存会

この資料は、発喜会発行の冊子「明神山」より「ちょうさい　編集室」の記事を元に作成ました。
参考資料・・矢野町史（第四節）、矢野公民館ホームページ（歴史）、

その他・・個人の思い出として祭りの様子を詳しく書いたもので、発喜会発行「絵下山」（秋祭り夜ばなし）、「宮下川」（矢野の秋祭りの今昔）なども参考とさせていただきました。